



未来に残すべきものとは

湯本一中一年 小松 和輝

僕が心に残った記事は、東日本大震災による原発事故の影響でこのままの状態では使えなくなってしまう大熊町の図書館を、建物を再利用してほしい町民と、地域の再開発の一環で解体を決めた町。苦渋の選択を迫られているという記事でした。

町民である渡部千恵子さんは「古里はそこに思い出があるから古里なんだ。復興を進める上で建物を残すという考えはなかったのか」と話しています。千恵子さんは震災前、町の保育士として子ども達と図書館を訪れていたそうです。また、図書館の上部にある時計台は、大熊町のシンボルとして町の人が親しまれてきたそうです。町の人からすると、とても思い出のある建物だったのです。

しかし町側は、この建物は他に利用する方法はなく、改修、維持管理費もかかってしまったため、別の場所に図書館や文化財の保存記録などの機能を集約した社会教育施設を整備する計画を立て、この建物を解体する方針に変更はないと説明していました。

町の人からすると、思い出の場所や自分達の町のシンボルがなくなってしまうのは、とても悲しいことになりはしないかと思えます。建物を解体することもなく、うまく利用できるような良い策はないのでしょうか。

僕は、もともと祖父が住んでいた昔からある家に、産まれて数ヶ月が経った頃引っ越してきました。ですが引っ越しをして一年も経たずに地震の影響で全壊になりました。家を解体することになったのです。祖父も父も思い出の柱を使ってほしいと大工さんにお願いをし、新築した家には昔の家の思い出の柱が建つ姿で使われていま

す。思い出のある大熊町の図書館やシンボルの時計台も、部分的に使えるものを再利用して、新しいもの材料として使用できればいいのではないのでしょうか。そうすれば震災前のものも残しつつ、町の新しいシンボルが出来るのではないかなと思います。

この記事を読んで、震災からもう十一年も経っているのに、まだこのような問題が残っているのかと少し驚きました。震災などの災害は、人の力では無くすることが出来ませんが、被害にあう人の数は一人でも少ない方が良いでしょう。災害による被害を少しでも少なくするために、震災のことを伝えていくことはとても大切なことだと思います。僕は震災当時、一歳四ヶ月だったので地震のことを全く覚えていませんが、父や母から聞いた当時のことをいつまでも忘れずにいようと思います。震災にあい、心を痛めてしまった人達がしっかりと前を向いて生きていくこと、そして昔を忘れて新しい明るい未来を作っていくことが僕は願っています。



僕たちができること

須賀川三中一年 梅宮 武琉

一本原ごみ排出量全国ワースト2位。この見出しを目にした時、僕は衝撃を受けた。なぜなら僕が住んでいる福島県は、自然が多くまちなみで、ごみが多いというイメージとはかけ離れているからだ。しかし、実際には一人一日一千三百グラムのごみを排出しているのが現実なのだ。その背景には震災や災害の影響に加え、新型コロナウイルスによる自粛生活がある。では、ごみが増えていることは仕方ないことなのか。この生活の中で僕たちができることは何か。今この問題に向き合うべきだと僕は考えた。

本県では、ごみの中でも家庭から出る生活系ごみが多いことが分かっている。僕は、社会の授業で習った「3R」の言葉を思い出した。例えばエコバッグを利用したり、詰め替えの商品を買ったりと、僕自身「あ、これなら自分にも簡単にできる」と感じた。

そして、もう一つ問題になっているのがごみの分別である。実際に、指定の袋がないままでは適切に分別されずに出されている。ごみ捨て場に捨ててしまえば、誰が捨てるのか中身に何が捨てられているのか分からなくなるため、意識も低くなってしまっているのだ。分別することで、資源は再利用しやすくなりごみが減るのだ。僕も市の分別一覽表を利用して捨てることを心がけている。今一度呼びかけて、正しい分別を習慣づけていくことが大切だと思う。

このことから、ごみを減らしていくには、僕達一人一人の意識が大切なのだ。改めて実感した。ごみを減らすことは地球環境を守ることに繋がるのだ。そして、ごみの排出量を最低限におさえ、誰もが誇れるきれいな福島県にしたいと思った。まずは、この現状を多くの人に知ってもらい、一人一人できることを考えていきたい。みんなが意識し合えば、いつかそれが当たり前になることが僕の願いである。

単にできる」と感じた。ほんの少しの工夫や意識をすることがごみを減らす大きな一歩になるのだ。そして、今問題となっている生活系ごみについて、僕は家族に話して聞いてみた。母の働いているパン屋では天気や時期によって作る数を調整したり、時間によって割引したりと、廃棄のパンを出さないように工夫しているそうだ。これは、近年問題となっている食品ロス対策に繋がるものだ。また、祖母は生ごみを水切りしてからごみに出すようにしている。調べてみるとなんと生ごみの約八パーセントは水分であることが分かった。だから、水切りや乾燥させることが大事なのだ。家族と話し合う中でも、様々な取り組みがされていることに気付いた。お互いの知識を共有することで自分ができることが見つかるのではないかと感じた。



核の先制不使用は認めない

蘆方中3年 菅野 笑瑚

広島、長崎に原子爆弾が落とされて今年で七十七年。核兵器を保有するロシアがウクライナに侵襲を続け、世界に打撃を与えている。核兵器に対する意識が高まる中「核の先制不使用」が核廃絶に向けての一步になると言われている。

核の先制不使用については私は反対である。第一の理由として、核の先制不使用を肯定してしまえば核兵器の存在も認めることになってしまうからだ。核兵器が存在する以上、平和な世の中であるとはいえないと思う。核の脅威によって、表面上戦争に発展してはいない状況にあるなら本当の平和ではないだろう。七十七年前、沢山の人が犠牲にされた核兵器。核兵器の本当の恐ろしさを知る被害者の平均年齢は、八十四歳を超えた。後世を生きる私達は、核兵器の恐ろしさを広く、そして長く、伝えたい。

では、私達に出来ることは何だろうか。まずは、核兵器の恐ろしさを伝えること。唯の被爆国の日本は、経験を語る事が出来る。世界のの人に核兵器をもたず影響を知ってもらい核兵器を恐れること。そして、どんな状況であっても国と国が協力し助け合うこと。文化の違いがあっても、所詮同じ人間で違いない。ODAという形で、日本政府も近年はアジアの地域を援助している。中村哲さんのように、他国の人と交流し、友好関係を築けば、政治界にも反映されていくのではないかなと思う。まずは、相手のことを受け入れること。お互いを受け入れ、認め合うことで争いはなくなる。争いという観念自体がなくなれば、核兵器の需要がなくなる。恐怖で支配することはできない。武力で解決出来ることは何もないというところに早く気づくべきだ。これから私達がすべきことは、互いにわかり合う努力をして、歩み寄るために話し合うこと。国単位ではなく、直面する問題に、地球規模で協力して立ち向かい解決することだ。

第二の理由は、核の先制不使用の考えが広がってしまったら、どんどん核兵器を肯定する国が増え、保有国が増え、後戻り出来なくなってしまうからだ。自国を守るために非保有国が核兵器を持ち始めたら、国同士が常に緊迫状態にあり世界中が核兵器に依存するだろう。そもそも先制不使用は、相手国が最初に攻撃しない限り、核を戦争の手段として使用しないという契約だ。つまり、核を使用しない訳ではない。使用してしまえば、技術が進歩した今、被害は計り知れない。地球は、人間だけのものではない。これ以上、破壊するのはもうやめよう。



日常生活を幸せだと感じるために

福島商高2年 安達 一葉

私は子供の頃から「サザエさん」、「ちびまる子ちゃん」が大好きな国民的アニメとして有名で、誰しも一度は観たことのある番組だろう。この新聞記事を見て、これらのアニメの何が面白いのかを考えた。他のアニメと比べて強いギャグ要素があるわけでもなく、シリアスな場面があるわけでもない。ただアニメの一家の日常が切り取られている。立ち返って考えると自分がこれらのアニメを漠然と観ていたことに気がついた。では何が人を惹きつける魅力になっているのか。キャラクターなどの要素もあるが、私はそれよりもアニメ全体に漂う日常生活感だと思

この新聞記事にあるように、アニメの中の一家は木造平屋に住んでいる。時には学校の人たちが、家が隣のひと、仕事で関係のある人とイベントなどを通して家族が

それぞれにコミュニケーションをとる。コミュニケーションを広く、しかし、アニメの中で描かれている日常は昔の日本の姿といえるだろう。現代の日本は人と人の直接的な繋がりが減ってきていると思う。インターネットが普及し画面越しで、直接でなくてもコミュニケーションができるようになった。また近年では新型コロナウイルスの影響もあり直接的な人とのコミュニケーションはより減っていると思う。私も実際にコロナウイルスが流行する前は隣の家に住む人と会話をしたり、時には家族で交流していたが現在はそういうことが切なくなった。だからこそ私たちはこの日常生活を切り取ったアニメの魅力を感じ、漠然と観ても楽しめるのだと思う。頑固な父がいて、優しい母がいて、隣家には笑い合える友人同僚がいて、そんな人々と日々過ごすコミュニケーションを交わして仲を深めていく。この一連の流れが現代日本の日常生活における理想だと思

インターネットでの会話もいろいろある。そんな人々と日々過ごすコミュニケーションを交わして仲を深めていく。この一連の流れが現代日本の日常生活における理想だと思



出生前診断の全国拡大

学芸大高3年 鈴木 ころこ

妊婦の血液から、胎児の染色体異常を調べる出生前診断が、全国に拡大している。全国の一六九箇所を基幹施設として、診断ができるようになった。出生前診断の流れとしては、まず、妊婦と医師で事前にカウンセリングを行う。そして妊婦から採血をし、血液に含まれる胎児のDNAを調べる。そして、陽性の場合には羊水を採取し、確定検査を行う。カウンセリングの結果を受けて、妊婦はその後の判断を医師に支援してもらえ

妊婦の血液から、胎児の染色体異常を調べる出生前診断が、全国に拡大している。全国の一六九箇所を基幹施設として、診断ができるようになった。出生前診断の流れとしては、まず、妊婦と医師で事前にカウンセリングを行う。そして妊婦から採血をし、血液に含まれる胎児のDNAを調べる。そして、陽性の場合には羊水を採取し、確定検査を行う。カウンセリングの結果を受けて、妊婦はその後の判断を医師に支援してもらえ

一方この診断は、中絶に繋がるケースもあるため、命の選別になりかねないという意見もある。もちろん命の選別をすることは良くないが、障害のある子供が産まれてから、育児を放棄したり、虐待をしたり、殺してしまったりする可能性もあるから、それはそれで問題なのではないか。ダウン症などの疑いのある子供が産まれてくると知り、全員が中絶という選択をするわけではないから、生まれてくる子供の幸せを考えると、出生前診断は悪いことではないと思う。

親と子が互いに幸せに暮らすための事前の準備として、出生前診断を受けるという方法が一般化し、認められ、妊婦がもっと堂々と受けられるような環境になって欲しい。



コロナ禍の中で

会津高3年 佐藤 響

八月二十一日に日本を代表するデザイナーである森永恵さんが亡くなった。このコロナ禍の中、他にも一昨年に山本真希さん、高田賢三さん、今年八月五日に三宅一平さんが亡くなったばかりだ。世界的に活躍したデザイナーの方が相次いでいなくなってしまう。そして、日本のデザイナーの世界進出するきっかけを作った森さんも亡くなりになり、一つの時代が過ぎ去った感じがする。

私は美術の小学校の教員を目指しており、デザインやクローキー等の基礎的な技術の習得と、洋画の制作をしている。福島県総合美術展、喜多方ふるさと展の風景展において青少年奨励賞を受賞することでもできた。今、いよいよ世界へ募集している国際展の西会津国際芸術村公募展にチャレンジしている。絵の勉強をする中で、ファッションにも興味があり古着が好き

現在高校三年生の私達の世代は、小学校入学式が東日本大震災一ヶ月後であり、放射線の影響から、思ったように外遊びができなかった。高校に進学すると、四月にすぐコロナ禍の全国一斉の休校となった。そして、現在もコロナ禍は続き、密を避け、修学旅行もできず、海外への留学もできず、高校生活もあと残り半年となってしまった。一人一台端末等、DXが叫ばれ、仮想現実、メタバース等が友達の間で流行している。

この記事にあるように、私はもともと人間的なリアルさ、素材感があるような芸術を手伝って教えた。私は、福島県の小学校の教員を目指しているが、未来の福島県の子供達には、森さんのように世界に飛び出すような児童を育てていきたい。

第13回みんぐ新聞感想文コンクール作品紹介